

日本書道史上における高島秋帆の書

Takashima Shuhan in a history of Japanese calligraphy

古谷 稔

Minoru Furuya

はじめに

第一章 高島秋帆の人と書

第二章 「尺璧帖」所収の高島秋帆書状―書風と時代背景―

第三章 日本書道史から見た高島秋帆の位置

おわりに

はじめに

大東文化大学が所在する、東京都板橋区高島平はかつて徳丸原とも呼ばれ、昭和四七年一月に初めての団地入居があつて以来、平成二八年で四四年目を迎えることとなる。「高島平」の地名の発祥は長崎の有力な町年寄で西洋砲術を修めて高島流砲術を創始した砲術家・高島秋帆（一七九八―一八六六）に由来する。

江戸時代における徳丸原の地は、幕末の内憂外患問題が深刻化するなか、老中・松平定信が文武奨励策を断行したことにより、そう

した風潮をうけて幕府大筒方などの大筒稽古場として頻繁に使用され、後に正式に幕府の稽古場となった。

吉田東伍著『増補大日本地名辞書』（第六卷・坂東）の武蔵（東京）北豊島郡「徳丸」の項に、「今赤塚村の大字とす、徳丸原と云ふは、東は志村原に連なり、北は荒川に至る。徳川幕府の比に、旗本諸家火砲の術を学習する者、往々此原に試み、今の射的場のごとし、当時東西十三町、南北八町と称したり。原中に姥塚籬塚など云ふ小丘あり」と記す。

秋帆は天保十一年（一八四〇）アヘン戦争の勃発を知り、幕府に洋式砲術の採用を建議し、翌年徳丸原で訓練を実施、一時投獄され塾居を命ぜられたが、ペリー来航を機に許され、講武所指南役となったことは歴史上、よく知られている。

その一方で、秋帆が書道史上に注目すべき書を残していることはあまり知られていない。本稿においては、現存する秋帆自筆の遺墨

を取り上げ、書道史上に位置づけることを試みたい。

第一章 高島秋帆の人と書

高島秋帆とその関連事項については、有馬成甫著『人物叢書 高島秋帆』（日本歴史学会編・吉川弘文館発行）、北島正元著『人物叢書 水野忠邦』（同上）に詳しい。このほか、事典・辞典の類（注1）などにも取り上げられている。いま、それらを参照しながら秋帆の伝記を辿ってみよう。

高島家の先祖は近江国高島郡の領主・高島河内守頼春より出で、その庶子八郎兵衛が天正二年に長崎に移住して市民となり、世々異国通商を許され、父・高島四郎兵衛茂紀は長崎取締役となった。

秋帆は寛政十年（一七九八）茂紀の三男として長崎に生まれる。江戸時代後期の砲術家、洋式兵学者。諱は茂敦、子厚。通称は四郎太夫、秋帆は号である。長崎町年寄であり、出島砲台を受け持った父の後を受け、長崎会所調役頭取をつとめた。父から荻野流、天山流砲術を学んだ秋帆は、のちに出島のオランダ人から急成長を遂げつつある西洋砲術を修得し、これらは高島流砲術と呼ばれた。伝存する『高島流砲術伝書』はオランダの砲術入門書の翻訳といわれている。天保五年（一八三四）頃には高島流砲術、洋式銃陣を教授するまでになった。

その後、秋帆はアヘン戦争における清国大敗の情報に衝撃をうけ、西欧列強国のアジア侵略を防御するには洋式砲術を採用すべきであると幕府に意見書を提出した。この翌年、幕府の命により江戸に出て、五月九日に武州徳丸原（東京都板橋区）においてわが国最初の洋式砲術演練が行われた。秋帆所持の輸入砲四挺の実射と歩騎兵の演練がそれである。

この徳丸原の演練は秋帆を含めて一〇〇名が確認されている（注2）。

この演練はたんへん見事に行われたため、名声を高めることとなり、幕府は高島流砲術を採用することとし、前掲の輸入砲すべてを買い上げた。これ以後、諸藩においてもひろく高島流砲術に注目が集まった。時の幕府は、新式砲術の威力、有用性を認めながらもおそれが全国に流布して己を危うくするを恐れ、当地直参の者一人をかぎって火術伝来の秘事を伝授すべきことを命じた。そこで葦山（静岡県伊豆の国市）に在った江川英竜（太郎左右衛門・担庵）へは伝授が出來ず、幕臣・下曾根金三郎へ伝授された。その後に至り、水野越前守忠邦は長崎奉行を経て、「火術の秘事は下曾根金三郎へは伝授せず御代官江川太郎左右衛門へ伝授せよ」と指令したが、すでに下曾根への伝授は終了し、結局、江戸においては下曾根および江川の二人に免許が伝授されたのである。

一方において、高島流砲術の隆盛は、幕府内部の守旧派の忌むところとなり、当時町奉行であった鳥居耀蔵（甲斐守忠耀）が長崎奉行伊沢政義と連繋して秋帆を罪におとしめようとした。ために天保一三年（一八四二）十月に秋帆父子は逮捕されて江戸に送られ、町奉行鳥居の取調べを経てのち、評定所で再吟味が行われた。その結果、老中水野忠邦は罷免、鳥居は禁錮に処せられた。秋帆は弘化三年（一八四六）七月に中追放の判決が下り、武州岡部藩に預けられた。

嘉永六年（一八五三）ペリー来航にともない、江川英竜の進言により秋帆は釈放され、通称を喜平と改め、江川のもとに身を寄せて鑄砲に従事した。安政二年（一八五三）講武所（幕府が旗本・陪臣などに武芸を講習させた所）の創建とともにその教授方頭取に任ぜられ、さらに講武所砲術師範を経て講武所奉行支配となり、幕府の近代化に寄与することとなった。慶応二年（一八六六）正月一四日、病没。享年六九歳。

高島流砲術の普及と伝播については、江戸で伝授を受けた江川・下曾根らの第二世代の門弟らによる功績が大きいとされる。ペリー来航後の安政元年頃から高島流や西洋流の名が高まった。幕府はそれまでの和流砲術を止め、オランダ式大砲等を用いた西洋式砲術を全国の大名家に命じたが、その大砲鑄造の核心部分を担ったのが高

島門弟の砲術師たちと見られ、江川門弟では一〇〇人以上、下曾根門弟では三〇〇〇人を超えると推察されている。江川の門弟、松代藩の佐久間象山に勝海舟が学び、下曾根の土佐藩門弟徳弘に坂本龍馬が学んでいたことも知られている（注3）。

なお、詳細については、『人物叢書 高島秋帆』や『高島平蘭学事始』（開館四〇周年記念特別展カタログ・板橋区立郷土資料館）ほかを参照されたい。

ところで、幕末という日本の近代へ向かう激動期に生きた高島秋帆の息吹を物語るものとして、書画の遺品に注目したい。

秋帆の書画は、現在までに二〇〇点以上の現存が知られるが、その大半は書の遺品で占められ、絵画はわずか一〇点程度と目されている（注4）。本稿では、書道史で取り上げられる書そのものに注目したい。

たとえば、中国・日本の書の遺品を集成した『書道全集』（全二八巻・平凡社）では秋帆の書は収載されていない。また、『日本の書』（全二二巻・中央公論社）の第一二巻「唐様」にも同様にその名は見えない。採用されているのは、『古文書時代鑑』に一点、小松茂美編『日本書蹟大鑑』に三点（うち一点は前掲『古文書時代鑑』と重複）、『皇室の至宝12御物・書跡Ⅲ』（毎日新聞社）に一点の都合四点に過ぎない。

これ以外には、展覧会カタログに出品物として収載されているものがある。とりわけ板橋区立郷土資料館で開催された秋帆関係の展覧会では数多くの秋帆自筆の書が取り上げられている。次に、管見に及ぶ範囲において、秋帆の現存遺品を整理しておきたい。

書の形態・書体・装丁等を考慮に入れて区分すると、

- (1) 掛幅楷書
 - (2) 掛幅行書
 - (3) 掛幅画賛
 - (4) 屏風
 - (5) 扇面
 - (6) 扁額
- となる。それぞれ現存の遺品および所蔵・出典・執筆年齢等を可能な範囲で示しておく。名称は各書籍・カタログの表示を用いるようにしたが、統一を図るため、変更したものもある。

(1) 【掛幅楷書】

- 1 高島秋帆兵学訓 (『古文書時代鑑』・小松茂美編『日本書蹟大鑑』第二五卷所収) 〳六九歳

(2) 【掛幅行書】

- 2 高島秋帆二行書 松月院蔵 (『高島平蘭学事始』所収) 〳

三一歳

- 3 高島秋帆二行書下曾根金三郎為書 板橋区立郷土資料館蔵 (『高島平蘭学事始』所収) 〳四四歳

- 4 高島秋帆「唐詩選」 板橋区立郷土資料館蔵 (『高島平蘭学事始』所収) 〳六〇歳

- 5 高島秋帆三行書 板橋区立郷土資料館蔵 (小原義雄氏寄贈) (『高島平 その自然・歴史・人』(以下、『高島平』) 所収) 〳六二歳

- 6 高島秋帆二行書 坂井正大氏蔵 (『高島平』所収) 〳六三歳

歳

- 7 高島秋帆詩書三行書 文行堂 (文行堂特輯二号所収) 〳六三歳

- 8 高島秋帆二行書「見義不為無勇也」 江川家蔵 (『人物叢書 江川担庵』所収) 〳六四歳

- 9 高島秋帆一行書 (久松家旧蔵) 板橋区立郷土資料館蔵 (『高島平蘭学事始』所収) 〳六六歳

- 10 高島秋帆行書幅 宮内庁三の丸尚蔵館蔵 (『皇室の至宝12 御物・書跡Ⅲ』(毎日新聞社) 〳六六歳

- 11 高島秋帆「文天祥正気歌」(節録) 板橋区立郷土資料館蔵 (『高島平』『高島平蘭学事始』所収) 〳六六歳

12 高島秋帆「文天祥正気歌」 板橋区立郷土資料館蔵（『高島平』『高島平蘭学事始』所収） 〓六七歳

13 高島秋帆東坡牘節録 文行堂（新興古書大即売展略目（平成二六年二月）所収） 〓六七歳

14 高島秋帆五言律詩（小松茂美編『日本書蹟大鑑』第二五卷所収）

（3）【掛幅画賛】

15 慧燈上人寄せ書き（高島秋帆・浅五郎ら長崎人寄せ書き） 板橋区立郷土資料館蔵（『高島平蘭学事始』所収） 〓四五歳

16 高島秋帆自画賛砲丸形茶釜図 板橋区立郷土資料館蔵（『高島平蘭学事始』所収） 〓六八歳頃

17 高島秋帆先生水墨虎図 田中温古堂蔵（『高島平』所収） 〓六四歳

18 竹の子図 板橋区立郷土資料館蔵（『高島平蘭学事始』所収） 〓江戸時代後期

（4）【屏風】

19 高島秋帆書六曲屏風 坂井正大氏蔵（『高島平』所収） 〓三六歳

20 高島秋帆筆詩書六曲屏風 長崎県立美術館蔵（『唐様の書』所収） 〓六一歳・六二歳

21 高島秋帆銀六曲屏風 松月院蔵（『高島平蘭学事始』所収） 〓六三歳

22 高島秋帆二曲屏風「幽雅・秋声」 板橋区立郷土資料館蔵（『高島平蘭学事始』所収）

（5）【扇面】

23 高島秋帆扇面書 板橋区立郷土資料館蔵（『高島平』所収） 〓六二歳

24 高島秋帆扇面書 坂井正大氏蔵（『高島平』所収） 〓六二歳

25 高島秋帆「文天祥正気歌」扇面書 板橋区立郷土資料館蔵（『高島平蘭学事始』所収）

26 高島秋帆鉄扇 石山美津氏蔵（『高島平』所収）

（6）【扁額】

27 高島秋帆扁額「環山」 板橋区立郷土資料館蔵（『高島平蘭学事始』所収） 〓四四歳

28 高島秋帆額「静和」 坂井正大氏蔵（『高島平』所収） 〓六〇歳

29 高島秋帆扁額「鉄蕉茶寮」 板橋区立郷土資料館蔵（『高島平蘭学事始』所収） 〓六四歳

30 高島秋帆筆「繩武館」典額 江川家蔵（『人物叢書』江川

担庵』所収) 〱六四歳

31 高島秋帆扁額「静遠霞城」 板橋区立郷土資料館蔵(『高島

平蘭学事始』所収) 〱六七歳

32 高島秋帆二字「桃源」 個人蔵(小松茂美編『日本書蹟大

鑑』第二五卷所収)

以上は、原本あるいは図版等を通じて確認したものであるが、これ以外に多くの遺品が散在しているに違いない。しかしながら、前掲の遺品だけでも、秋帆の書をおよそ理解することは可能であろう。年齢別に見ると、三十代が二点、四十代が三点、五十代が無し、六十代が二〇点、不明が七点、となる。六十代に集中しているのが目立つ。これには、天保一三年に四五歳で秋帆父子が逮捕され、その後弘化三年四九歳で秋帆に判決が下り中追放となつて蟄居を命ぜられて以来、嘉永六年に五六歳で釈放されるという運命と無関係ではあるまい。その後、江川英竜に身を寄せ、喜平と改名し、安政三年に五十九歳で西洋砲術開祖として賞詞を受け、十人扶持を与えられ、その翌同三年に六十歳で講武所の砲術師範役を命ぜられ、七人扶持に加増された経緯などが影響し、秋帆の晩年に安泰をもたらしたことによると思われる。

秋帆の書を見ると、掛幅・屏風・扇面・扁額と多様な領域にわたつており、書道史から見ても江戸時代末期に流行していた形態や書

風の共通性が認められる。これらについては第三章で触れることにする。

第二章 「尺璧帖」所収の高島秋帆書状―書風と時代背景―

前章において、秋帆の伝記と書の遺品を掲げた。その中に書状は含まれていない。書状は作品として執筆したものではなく、特定の相手に自らの用件を認めたものである。とはいえ、書道史上における書状は、平安初期の空海筆「風信帖」、平安中期の藤原佐理筆「離洛帖」ほか、書としてきわめてすぐれた書風を示すだけでなく、内容的にも時代背景を物語る興味深い遺品が多い。

本章で取り上げる「尺璧帖」(東京国立博物館蔵・列品番号B―二三九〇)所収の高島秋帆書状(図1)については、改めて特別観覧によつて原本を熟覧する機会を得た。形態は帖仕立てになるもので、現在六帖、二幅(池大雅書状・良寛書状)の体裁をとっている。上記二幅は本来、六帖の中に所収されていた。

「尺璧帖」六帖はいずれも同じ規格・装丁で、第六帖の寸法は、縦二七・二、横一九・六、厚さ五・五センチ。秋帆書状は紙本墨書、本紙寸法は縦一六・〇、横七三・七センチ。後半部分(横五八・七センチの箇所)に継ぎ目があり、巻紙に執筆したものとわかる。

本文は次の通り。

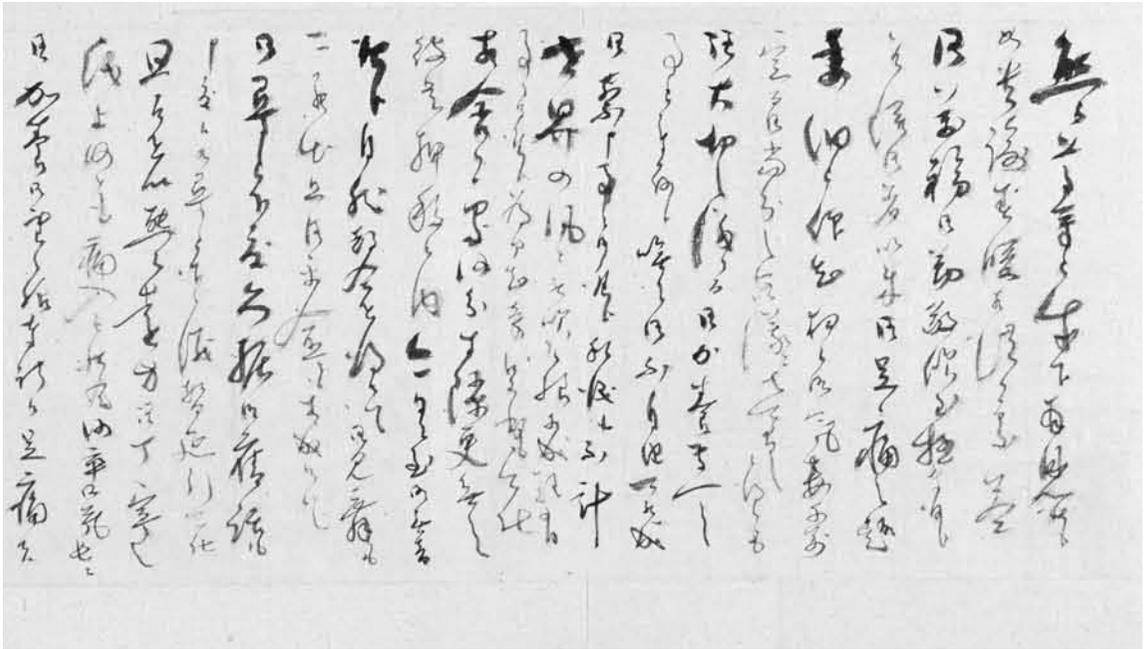
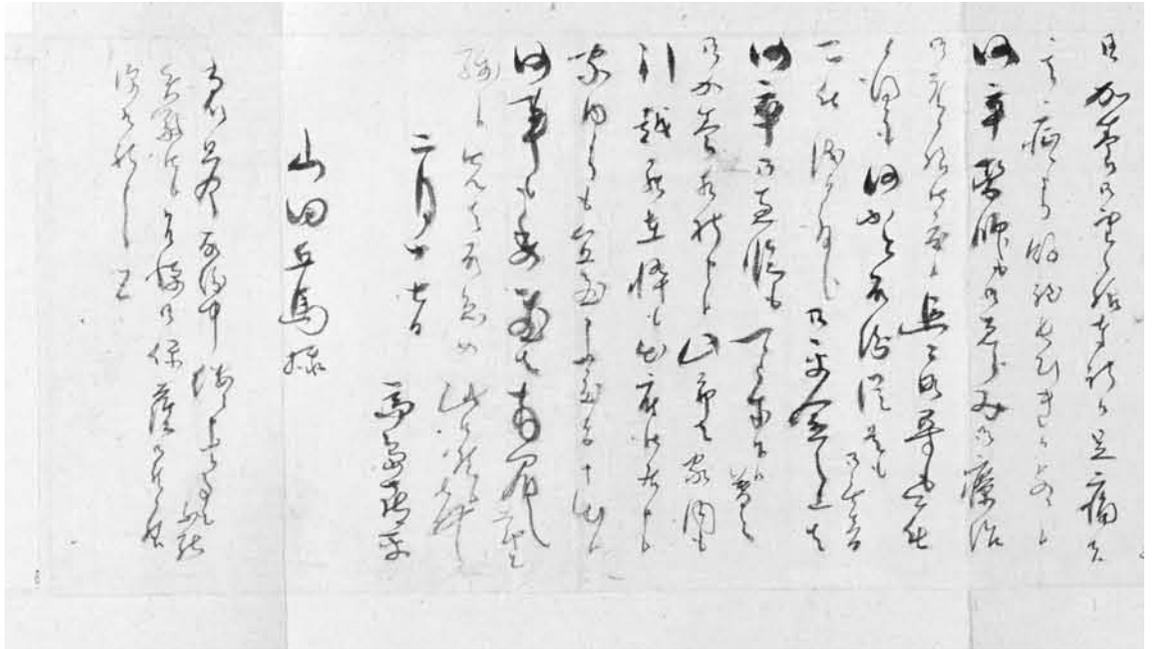


図1 高島秋帆書状〈「尺壁帖」所収〉（東京国立博物館蔵）
紙本墨書 本紙16.0×73.7cm

【釈文】

態々尊筆被成下、拜見仕候。
如貴論、春暖相催候処、益
御万福御勤、敬欣至極奉存候。
乍併、御着以来、御足痛之趣、
委細被仰知、扱々御気毒千万、
定而御当分之御儀ニは可有之候得とも、
御大切之儀ニ而、御加養專一之
事と奉存候。嗚々御不自由可被成
御察申事ニ御座候。私儀も不計、
世界の風ニ被吹候様相成、難有
事ニ御座候。為御知、旁呈書も可仕、
相合候処、何分寸隙更無之、
彼是押移候内、今日に至、御無音
存候。自然、都合を得候ハバ、御見舞ニも
可罷出、且御平癒ニも相成候ハバ、
御尋被下度、久振御旧話も
申度候。御尋被下之儀、暫延引可仕、
思召を以、態々遠方御丁寧之
紙上、何とも痛入候仕合、何卒御気長ニ



御加養御坐候様奉折候。足痛者

其症二より、余程長引候もの二候。

何卒医師も御系らみ、御療治

御座候様仕度候。追々、御尋も可仕

候得ども、何かと取紛、従是も御無音

可仕儀と存じ候。御平癒之上は

何卒、御惠臨も可被忝候バ、暮々

御加養相折申候。此節は家内も

引越罷在、悴も出府仕居申候。

家内よりも宜敷申上度旨、申出候。

何事も御委敷は拝眉之節二

残候。先は取急如此御座候。頓首。

二月十七日

高島喜平

山田兵馬様

尚以、只今取紛中、縷々申上候事も不能

失敬仕候。乍憚、御保蔭御座候様、

深御礼申候。以上。

【読み下し文】

態々(わざわざ)、尊筆(そんぴつ)成し下され、拝見仕(つかまつり)候。

貴諭(きゆ)の如く、春暖相催し候処(ところ)、益(ますます)

御万福、御勤め、敬欣至極(けいきんしごく)に存じ奉り候。

併し乍ら、御着き以来、御足痛の趣、

委細仰せ知らされ、扱々(さてさて)御気毒千万、

定めて御当分の御儀にはこれ有るべく候えども、

御大切の儀にて、御加養專一の

事と存じ奉り候。嘸々(さぞさぞ)御不自由に成らるべきと

御察し申す事に御座候。私儀も計らず、

世界の風に吹かれ候様(よう)に相成り、有難き

事に御座候。御知らせの為、旁(かたがた)呈書も仕るべく、

相含み候処、何分の寸隙(すんげき)更にこれ無く、

彼是(かれこれ)押し移り候内(うち)、今日に至り、御無音(ご

ぶいん)に

存じ候。自然、都合を得候はば、御見舞にも

罷(まか)り出さべく、且つ御平癒にも相成り候はば、

御尋ね下され度(た)く、久し振りに御旧話も

申したく候。御尋ね下さるるの儀、暫し延引仕るべく、

思召(おぼしめし)を以て、態々、遠方御丁寧の

紙上、何とも痛入り候仕合(しあわせ)、何卒、御気長に

御加養御坐候様に祈り奉り候。足痛は

其症により、余程長引き候ものに候。

何卒、医師も御ゑら(選)み、御療治

御座候様に仕りたく候。追々、御尋も仕るべく

候らえども、何かと取り紛れ、是れよりも御無音

仕るべき儀と存じ候。御平癒の上は、

何卒、御惠臨も忝(かたじけな)がるべく候はば、暮々(くれぐ

れ)も

御加養相祈り申し候。此の節は家内も

引越し罷り在り、悴(せがれ)も出府仕り居り申し候。

家内よりも宜敷(よろしく)申し上げたき旨、申し出(いで)候。

何事も御委敷(くわしく)は、拜眉の節に

残し候。先は取り急ぎ、此(かく)の如くに御座候。頓首。

二月十七日

高島喜平

山田兵馬様

尚(なお)以て、只今取り紛れ中、縷々(るる)と申し上げ候事

も能(あた)わず、

失敬仕り候。憚(はばか)り乍(なが)ら、御保蔭御座候様、

深く御礼申し候。以上。

右の一通は、本文三二行でやや長文の書面である。終わりに「二月十七日」の日付に「高島喜平」の署名を加え、「山田兵馬」に宛てている。宛所の後に、三行の追伸を付記する。

本文の書を見ると、漢字と仮名を交えているが、書風は闊達にして流麗であり、書の線質は伸びやかで文字の大小の変化や墨継ぎにも工夫が施されている。全体的に見ても、冒頭から末尾まで一貫性があつて、筆路明確である。前章で取り上げた漢字作品を中心とした作例とは異なる書の世界であり、格調が高い。

本書状の特徴は、視覚的に読みやすい書式で書かれていることに気付く。それは一行置きに濃淡・太細の変化をつけていることである。但し、一個所注意したい部分がある。七行目「御大切之儀云々」の次は、九行目の「御察申事云々」の行を濃く太く書くべきところ、そこは前行と同じレベルで淡く細く書いている。つまり、例外的に、七行目の次は九行目でなく、二行置いて十行目に飛び、「世界の風ニ被吹候様云々」へと移行して墨を継いでいる。おそらく、秋帆は、本状の中で、「世界の風云々」をもっとも強調したかったのではあるまいか。

文面を辿ると、秋帆にとって宛所の人物が極めて親しい間柄にあ

り、勤めを果たして帰還の報告を受けた秋帆が、足痛を煩う相手に厚い労いの言葉をもって返している。「山田兵馬」なる人物はいったい誰であろうか。たとえば、日付と宛所の頭の高さを比較すると、同じ高さである。書式から見ても、秋帆とはほぼ同格に近い人物と判ぜられる。

ここで手がかりとして、書状の巻頭部分の紙背を透視すると、朱筆で次のような、三行の書き付け（筆者不明）が見出された。

長崎高嶋四郎太夫之筆

水野様御内山田丘馬様より

被下候文通一

と判読できる。水野様とは、遠州浜松藩主、老中、水野忠邦（一七九四—一八五二）と思われる。「丘馬」は「兵馬」の誤りか。忠邦がアヘン戦争での清国の全面的な敗北を知って大きな危機感に直面し、その解決策として推進しようとした江戸湾防備計画が幕府内部の守旧派に阻まれて苦慮するなか、幕府の軍備の刷新をはかるため、当時第一流の西洋砲術家として名を馳せた秋帆に白羽の矢が立った。忠邦は幕閣にはかつて天保一二年三月に秋帆を諸組与力格に取り立て、ついで上府を命じて用人秋元宰助や代官江川英竜を入門させた。そして五月九日に前述した徳丸原における演練が実施され、これも忠邦が幕閣を説得して行われたといわれる。他方、忠邦は文

化文政以来の積弊を改め、奢侈淫靡の風を一掃せんとして、いわゆる天保の改革を断行したが、大名・旗本・農民・町民など幅広い階層に信任が得られず、二年余りで免職となる。その後も再度老中となったが、往年の権勢は失せ、弘化二年に再辞職、在職中に鳥居耀藏（忠耀）らの疑獄ありとの嫌疑を受けたことを咎められ、二万石を没収、隠居謹慎を命ぜられた。家督を譲られた世子・忠精は、この年一月に羽州山形に転封、五万石を与えられた。嘉永四年（一八五二）二月一六日幕府は忠邦の重病なるを聞きつけ、その讒を解いた。同日、江戸藩邸において五八歳で没した。

忠邦が幕府の海防体制の強化ならびに軍事改革と併せて浜松藩の軍事改革を老中辞職後も続行し、老中を再辞職した弘化二年三月をもって一応の完成を見たときされる。藩の軍法を一定に編成するために従来の諸流を止めて長沼流兵学を採用した。同流佐枝派に属する清水俊蔵（赤城）は西洋砲術を取り入れた兵学者で、その門下に三州田原藩士・村上範致（のりむね）や諸藩の軍制改革を指導した小野寺慵齋（ようさい）らがいる。村上は秋帆の徳丸原の演練にも参加している。慵齋は師の赤城と同じく西洋砲術を評価し、高島流砲術を長沼流に組み入れるべきであると主張した。そこで自ら当時藩で高島流兵学を教えていた山田兵馬に入門して同流を修得しようとしたが、高島流砲術の信奉者に嫌われ、兵馬は入門を許可したもの

の、秘伝を教えなかったため、慵齋と不仲になったといわれる。しかしながら、慵齋の本心は、重臣らの心構えが兵学を個人の修養のみを目的とし、国防的気概の欠如する点に不満があった。その解決に向けて忠邦が慵齋に期待を寄せたとされる（注5）。

このように、山田兵馬は浜松藩における水野忠邦の配下であり、高島流兵学を教えていた人物と判明した。当然ながら、秋帆とは深い絆で結ばれていたと考えられる。

それでは、本書はいつの頃に執筆されたものだろうか。それは次の文面の記載から推察が可能である。

（1）私儀も計らず、世界の風に吹かれ候様に相成り、有難き事に御座候

（2）此の節は家内も引越し罷り在り

（3）悴も出府仕り居り申し候

まず、（1）について見てみたい。秋帆が嘉永六年（一八五三）八月六日に釈放後に江川英竜邸に落ち着いて程なく、同一五日付けで海防掛御用取扱として御代官江川英竜手附に召し抱えるという辞令を受けた。同二八日には大砲鑄造方御用掛を申し渡された。これは幕府が英竜の進言に従い、品川台場を築き、かつ相州海岸・猿島、および下田（伊豆）、摂海（大阪湾）に砲台を新築することとなり、その手始めに英竜が品川台場構築の命を受けて着手し、安政二年

（一八五五）五月に完成した。英竜はこの間一月一六日に急逝し、その完成を見るに至らなかった。その間、秋帆はその嗣江川保之丞（英竜の三男・英敏）の補佐役となり任務の達成へと導いた。これにより、幕府より保之丞および秋帆に賞詞が贈られた。

同三年四月二五日には、築地講武所の開所式が挙行された。同年一月二五日には秋帆は西洋砲術の開祖として賞詞を受けた。この頃から「火技之中興洋兵之開基」の印を所用する（注6）。万延元年（一八六〇）神田小川町に新たに講武所が竣工し、二月三日に開所式があった。「世界の風云々」は、こうした一連の開国や国防に對し、世界に對向する幕府の方針が、秋帆の周辺にも波及してきたことを意味するものか。

そして、(2)の引越しの件は、この後、居宅を小石川小十人町に移し、同所から小川町の講武所に通ったというが、これとの関わりが推察される。

さらに(3)「悴も出府」とあるのは、子息・浅五郎（茂武）のことで、前章で述べたように、長崎町年寄に在った際、事件に連座して父秋帆とともに江戸に送られ、五十日の押込の刑に服したが、再び長崎に帰郷し、高島流砲術師範をした。その後、秋帆が釈放されて講武所師範となるが、彼も講武所砲術教授方となったが、これを指すのであろう。なお、浅五郎は文久三年（一八六三）三月に、

將軍家茂の上京に隨行護衛を下命されたが、任務中に京都で病没、四四歳であった。

したがって、本書は万延元年二月三日に神田小川町に新たに講武所が開所されてほどない、二月一七日付けの書状と推定され、秋帆六三歳の筆と考えられる。

第三章 日本書道史から見た高島秋帆の位置

これまで高島秋帆の書を形態別に紹介してきたが、それらは掛幅・屏風・扇面・扁額・帖仕立てといったものである。ほかに巻物（卷子本）のものもある。秋帆が活躍した江戸末期に確認される書の形態は、古い時代に存在していた。

掛幅は広間や茶室の床の間に飾られ、これまた鑑賞に供するため代表的な表具形態である。屏風とは違った、大小様々な規格があり、また表具の裂地にも中国・日本の特殊なものが用いられた。

正倉院に現存する奈良時代の「鳥毛篆書屏風」は中国・唐の宮廷文化に倣ったものであり、また、平安時代に重視された悠紀主基屏風は、天皇が即位後に最初に行う新嘗祭（いなめさい・陰曆一月の卯の日にその年の新穀を天地の神々に供え、天子みずからも食し、臣下にも賜る式典）である大嘗会（だいじょうえ）に供せられたもので、公家日記などの記録に残されている。その屏風の中に部

分的に施される色紙形は、当時第一級の能書が揮毫の筆をとったものであり、藤原行成を祖とする世尊寺家第六代目の伊行が著した『夜鶴庭訓抄』には歴代の屏風色紙形の筆者名が記されている。

このように、屏風は大きな室内に立てて装飾的役割を果たすだけでなく、儀式的なしつらいにも用いられた。時代とともに、建築様式の推移にしたがって、屏風の内容にも変化が見られる。桃山・江戸時代には、漢字も仮名も大字の書が屏風に取り入れられた。

また、扇面は風を扇ぐための携帯用であるが、その表面に書を書いて楽しむことは、現代にも通用する。扁額は宮廷や寺院建築の玄関に相当する門に掲げたり、家屋の室内に掲げて仰ぎ見るものであり、そこには筆者の精神性や書の風格が見る者に訴えかける。

ここで江戸時代の書道史を概観したい。まず、仮名書道または和様漢字の書を見ると、近衛信尹・本阿弥光悦・松花堂昭乗ら「寛永の三筆」が上げられる。なかでも近衛信尹（一五六五—一六一四）筆「松原図屏風」「いろは屏風」（以上、禅林寺蔵）や「和歌屏風」（東京国立博物館蔵）など、大字仮名の屏風（注7）に注目すべきである。一七世紀初頭に隆盛した和様書道はほかに烏丸光広や伊達政宗らの活躍も忘れがたい。その後、後水尾天皇や霊元天皇など宸翰、近衛家熙など公卿の書、加藤千蔭など国学者の書、千姫や春日局など女筆といった部分的に優れた書も伝存するが、次第に御家流

など定型化した書流に阻まれ、やや衰退の傾向を見せる。

これに対して、漢字書道は、江戸初期に大徳寺の禅林墨蹟など特殊な書風も見出されるが、その一方で注目された中国明末の僧・隠元隆琦（一五九二—一六七三）らの書がそれである。隠元は承応三年（一六五四）に来日、やがて四代將軍・徳川家綱に謁し、山城の宇治に万福寺を開創、わが国黄檗宗の開祖となった、隠元・木庵性瑫および即非如一とともに「黄檗の三筆」と並び称せられ、三者三様の力強く剛健な書風を発揮した。この黄檗僧は、このほか独立性易も知られ、一七世紀後半に一群の能筆パワーとして脚光を浴びた。

鎖国政策がとられた江戸時代には、長崎が海外貿易の玄関口であり、多くの日本人もその恩恵にあずかったのである。北島雪山（一六三六—一六九七）もその一人。前掲、独立に書を学び、愈立徳に文徵明の書法を受けたと伝える。わが国唐様の祖と呼ばれる雪山の書は、黄檗流を学びながらも、時流を超えた独自性の強い書風を展開した（図2）。その書法は細井広沢（一六五八—一七三五）（図3）に受け継がれ、広沢が唐様を開拓した功績は書道史上大きく評価されている。広沢が漢字書道を推進した一例として、屏風に大書した作例が特筆され、現存遺品を見ても大型化した建築様式の中で鑑賞に供されたことが彷彿として浮かぶ。

唐様の書が隆盛したのは、江戸幕府が儒教を文教政策の一環とし

て重視した点にある。四書五経や『唐詩選』『古文真宝』といった漢詩文集が盛んに読まれるようになった。その一方で、そうした文学を愛好し、自ら漢詩文を作り、それを中国風の唐様で書をかくことはこの上ない新鮮さともなったに違いない。その書は鎌倉・室町時代の五山僧らのあいだで流行した宋の蘇東坡・黄庭堅・米芾・張即之や、元の趙孟頫らの書風も江戸の漢字書道の底流に潜んでおり、一方で新たに明の文徵明・祝允明、そして董其昌らの影響も顕著に及んでいる。

広沢の後は、関思恭や三井親和らに受け継がれ、さらに儒者として名高い荻生徂徠もユニークな唐様を樹立している。

要するに、唐様は、日本における中国風の書を意味するが、これは各時代に中国の影響をうけつつ開拓されていった書であり、単なる中国の模倣ではなく、日本ならではの漢字書道としてとらえられるよう。それは同じ漢字を用いながら、わが国においては日本漢文で理解し、日本語を基調としている点にある。唐様の語を広義に用いることも可能であるが、書道史においては江戸時代の唐様が、和様に対抗する強い存在感を示す書風として、「唐様」といえば、江戸の唐様を指すのが今日では一般的である。

さて、ここで高島秋帆の書を眺めてみよう。江戸時代末期に活躍した秋帆は、それまでの書道史に連結した時代の流れを受け止める

ことができる。長崎の出身であり、同地において青少年期を過ごし、長崎町年寄の家で育った秋帆は、おそらく幼少から漢学や書道教育を受けていたに違いない。エキゾチックな港町で、吸収力旺盛な年代に、中国人が得意然として嗜む書の世界に関心を向けないはずはなからう。

さいわいに現存する秋帆の書には、執筆年代の明らかな遺品が多い。前掲一覧の中でもっとも若い書は「高島秋帆二行書 松月院藏（『高島平蘭学事始』所収・図4）（三一歳・No.2）」である。この二行書は渡来清人である施南金の影響下にある書風と見られている（注8）。筆致を見てゆくと、行書体の文字は紙面によく食い込み、墨を付けてから墨が枯れるまで筆を進め、墨の潤濁の変化が見てとれる。いかにも秋帆の能筆の程が感得できる。「高島秋帆書六曲屏風 坂井正大氏藏（『高島平』所収）（三六歳・No.19）」は闊達な筆致でリズム感に富み、文字の大小や連綿をともなった書風は筆力もあり、五年前に書かれた二行書をさらに進化させた優品と思われる。秋帆の創意工夫が窺える。四四歳の筆になる「高島秋帆二行書下曾根金三郎為書 板橋区立郷土資料館藏（『高島平蘭学事始』所収・図5）（四四歳・No.3）」は、徳丸原で演練を行い、下曾根金三郎に砲術を免許した年でもあり、秋帆の充実した筆力が発揮された書である。二行書（図4・No.2）と比較して前者は文字に傾きが認めら

れるが、この下曾根へ贈られた書は、文字が立ち上がって垂直に流れ、渴筆にも力がこもり気合いが入っている。このほか四十代の書は二点あり、「高島秋帆扁額（環山）板橋区立郷土資料館蔵（『高島平蘭学事始』所収・図6）（四四歳・No.27）および「慧燈上人寄せ書き（高島秋帆・浅五郎ら長崎人寄せ書き）板橋区立郷土資料館蔵（『高島平蘭学事始』所収）（四五歳・No.15）」が確認されるが、これらは施南金の書法を踏まえているように推察される。

秋帆の三〇（四〇代）の書は、渡来清人の影響下にあることがおよそ把握された。次に五〇代の書として明らかなのは見あたらない。これは弘化三年（一八四六）七月に中追放の判決が下り、武州岡部藩に預けられてから、嘉永六年（一八五三）に釈放されるまで、秋帆の四九歳から五六歳までに相当し、丁度この間の書が空白の状態である。

六〇代の書を見てゆくと、その数も多い。特徴の一つとして、大字の書が目立つことである。まず、掛幅作品を見てみよう。

掛幅はその大半が行書体である。六〇代が中心であるが、それも前半よりも後半の作に見るべきものがある。例えば「高島秋帆一行書（久松家旧蔵）板橋区立郷土資料館蔵（高島平蘭学事始』所収（六六歳・No.9）」は骨格のある雄勁な趣が在り、「高島秋帆行書幅宮内庁三の丸尚蔵館蔵（『皇室の至宝12御物・書跡Ⅲ』毎日新聞社・

図7）（六六歳・No.10）」の四行書も一字一字丁寧に力強く筆を運んだ風格ある一幅である。また、秋帆が好んで書した「文天祥正気歌」は四行書の作品（高島秋帆「文天祥正気歌」（節録）板橋区立郷土資料館蔵（『高島平蘭学事始』所収・No.11）と、細字の作品「高島秋帆（文天祥正気歌）同前所収・図8）（六七歳・No.12）」があるが、前者は書きなれた行書であり、後者は緊張感のある楷書の行書といえる（注9）。

さらに、六九歳のほぼ絶筆とも考えられる楷書の「兵学訓（『古文书時代鑑』・『日本書蹟大鑑』第二五卷所収）（六九歳・No.1）」は表面的に厳しさはなく内に力を秘めた、穏和で豊かな書風である。

次に屏風作品を通覧したい。「高島秋帆筆書六曲屏風 長崎県立美術博物館蔵（『唐様の書』所収）（六一歳・六二歳・No.20）」および「高島秋帆銀六曲屏風 松月院蔵（『高島平蘭学事始』所収・図9）（六三歳・No.21）」は、いずれも屏風の大作で、前者は一双の各隻に「麟鳳龜竜雲雨」「雪花雪琴詩酒」といった文字を大書しその下に詩句を付した書式を取る。後者は詩文に交えて「琴詩酒」「雪月花」の大字ををそれぞれ一扇おきに配置するという、大きな屏風を活かした作品の効果的な構成が看取される。単調さを排除したこうした方法は、すでに細井広沢が試みており、京都国立博物館蔵「七言聯句」（六曲一双・『唐様の書』所収）に見える。さらに遡

って、江戸初期の黄檗僧らの書に、主要な大字に対して注を付す手法があり、秋帆はそれらを継承している。書風も秋帆独自のねばり強い筆致と字形が窺える。執筆年齢不詳の「高島秋帆二曲屏風（幽雅・秋声）板橋区立郷土資料館蔵（『高島平蘭学事始』所収・図10）No.22」は、おそらく晩年の筆であろう。秋帆の自由な心境を遺憾なく発揮した堂々たる書風である。これに類した二曲屏風は、市河米庵・巻菱湖とともに「幕末の三筆」として有名な貫名菘翁（一七七八—一八六三）の二曲屏風「克己復礼」（菘翁美術館蔵・図11）があり、江戸末期に流行した様子がわかる。

このほか、扇面・扁額も書しているが、いずれも依頼に応えた作品である。秋帆の中心を成すものは、行書であり、なかでも屏風・掛幅仕立ての作品に見ごたえがある。

一方、第二章で取り上げた書状（図1）については、漢字と仮名がよく馴染み、相手を思いながら、語りかけるように書いている。なお、板橋区立郷土資料館に書状三通が所蔵されているが、このたびは触れない。

最後に、「高島秋帆自画賛砲丸形茶釜図 板橋区立郷土資料館蔵（『高島平蘭学事始』所収・図12）No.16」を紹介しておきたい。漢字の草書と仮名を交えて重厚で豊かな筆致を示す画賛である。「保運遍武の釜打かけて君か代は夢の絶まにし（主）おと

そきく」と三行に賛を加える。「保運遍武」は「ほうんへむ」とでも判読できようか。『日本国語大辞典』によれば、「ボンペン」の項にオランダ語の (bonnen) 《ホンペン・ボンペン》と示し、「爆弾」の意に解されている。これら漢字と仮名を交えた書は秋帆が漢字書法を本格的に学んだ成果が仮名書法にも連鎖して及び、書風形成がなされたと見るべきであろう。

日本書道史における江戸時代は、和様書と唐様書の二大潮流として説かれている。漢字は中国・明から渡来した黄檗僧らの勢力が強く、そうした影響下に唐様が一大ブームとなって脚光を浴びた。それらは一様ではなく、中国書法を根底に置きながらも、個性的な書を展開する儒者・文人・僧侶らが様々な書を残している。このような系列上に高島秋帆を位置づけることができるであろう。

これに加えて、このたび取り上げた書状には、その時代背景が垣間見えるとともに、漢字と仮名の二つの書法が融合して表現されていることは、秋帆の書家・文人としての有り様を再認識できたと言えよう。

おわりに

本稿を執筆するきっかけになったのは、大東文化大学が所在する、「高島平」（東京都板橋区高島平）の地名が、長崎の有力な町年寄で

高島流砲術を創始した砲術家・高島秋帆に由来することを知ったからである。

本考察を通じて、秋帆が日本の近代国家に寄与する根源的な人物であったことや、ペリー来航という歴史的事実を確認する一方で、幕末維新の建国に向けて発揚する人々の動向をより鮮明に受け止める機会が得られたように思う。秋帆にとって、江川英竜（太郎左右衛門・担庵）の存在はじめ、世界を自覚して開国へ向けて尽力した多くの志士たちのひたむきな精神が、秋帆の書を通じても伝わってくるものがある。

一方で、書なるものが、各時代の政治や文化と深い関わりがあることも、改めて自覚する契機となった。日本書道史において、中国書法が各時代にわたって重大な影響を及ぼし今日に至っているが、江戸時代末期に活躍した一人として、砲術家であった高島秋帆を書道史上に位置づけることが可能となった。

とりわけ、秋帆が書道史上に多岐にわたる書を残していることは驚くべきであり、また書体も漢字を中心に仮名にも見るべきものを残している。漢字は当時流行の唐様が時代の先端を行く潮流に乗って秋帆の書も息づいているように思われる。秋帆が漢字中心に書に精力を注いだことは遺品に明らかであるが、書状や画賛の遺例にも見るように、仮名書法においても漢字の中に融け入るように調和が

なされており、それは秋帆独自の工夫によって形成された書風と言えるだろう。

【注】

〔注1〕高島秋帆については、『大人名事典』（平凡社発行）、『大日本人名辞書』（講談社発行）、『国史大辞典』（吉川弘文館発行）、『日本歴史人物事典』（朝日新聞社編）、『国書人名辞典』（岩波書店発行）、『明治維新人名辞典』（日本歴史学会編・吉川弘文館発行）などに取り上げられている。

〔注2〕特別展『高島平蘭学事始』カタログ一〇頁、史料3「高島秋帆による徳丸原演練（参加者一覧）」には参加者名、操練役務、帰属身分、入門場所などが示されている。

〔注3〕特別展『高島平蘭学事始』カタログ五六頁、「高島とその門弟」解説。

〔注4〕「高島秋帆の書画」（特別展『高島平蘭学事始』カタログ七五頁）。

〔注5〕北島正元著『人物叢書 水野忠邦』

〔注6〕高島秋帆行書幅（No.10・宮内庁三の丸尚蔵館蔵）に捺印される。

『皇室の至宝12 御物・書跡Ⅲ』二二六頁、保谷徹解説。

〔注7〕特別展『詩歌と書』（東京国立博物館）カタログ図版。

(注8) 『皇室の至宝12 御物・書跡Ⅲ』94「行書幅」保谷徹解説。特
別展『高島平蘭学事始』カタログ七五頁「高島秋帆の書画」解説。
稿者は、施南金の自筆本を閲覧する機会はないが、画像資料により
確認している。

(注9) 萬曆二十三年(一五九五)正月二十一日の奥書をもつ「萬曆二十
三年封豊臣秀吉為日本国王誥命」(大阪市立博物館蔵) 大庭脩
著『古代中世における日中関係史の研究』(同朋舎出版発行)の口
絵写真図版参照。秋帆の細字「文天祥正気歌」はこうした萬曆二十
三年頃の書風に酷似する。

【参考文献】

有馬成甫著『人物叢書 高島秋帆』(日本歴史学会編 吉川弘文館発行)
北島正元著『人物叢書 水野忠邦』(日本歴史学会編 吉川弘文館発行)
仲田正之著『人物叢書 江川担庵』(日本歴史学会編 吉川弘文館発行)
戸羽山瀚編著『江川担庵全集』(巖南堂書店発行)
小松茂美編『日本書蹟大鑑』第二十五卷(講談社発行)
大庭脩著『古代中世における日中関係史の研究』(同朋舎出版発行)
『皇室の至宝12御物・書跡Ⅲ』(毎日新聞社)

【展覧会図録】

『詩歌と書』(東京国立博物館・一九九一)

『唐様の書』(東京国立博物館・一九九六)

『高島平 其自然・歴史・人』(板橋区立郷土資料館・一九九八)

『貫名菘翁展 阿波に伝わる菘翁の書画』(徳島県立文学書道館・二〇〇八)

『高島平蘭学事始』(板橋区立郷土資料館・二〇一一)

《付記》

本稿を成すにあたり、東京国立博物館・板橋区立郷土資料館において
は、所蔵品の特別観覧の機会に恵まれた。また、写真図版資料について
は、宮内庁三の丸尚蔵館・東京国立博物館・板橋区立郷土資料館・宗教
法人松月院・菘翁美術館・株式会社二玄社に提供いただいた。

特別観覧では、恵美千鶴子(東京国立博物館)、小西雅徳(元板橋区
立郷土資料館長)、齋藤千秋(板橋区立郷土資料館)の各氏にお世話に
なった。さらに資料収集において、宮里司(大東文化大学書道研究所)、
隅田英二(徳島県立文学書道館)両氏に協力いただいた。
ここに記して感謝の意を表します。



図2 北島雪山筆「梧涼」二大字（個人蔵）
紙本墨書 本紙35・4×63・2cm



図3 細井広沢筆「文語屏風」（東京国立博物館蔵）
紙本墨書 各扇本紙122×56・8cm

図4 高島秋帆筆「二行書」(松月院蔵)
絹本墨書 本紙69・5×28・5cm



図5 高島秋帆筆「二行書」下曾根金三郎為書(板橋区立郷土資料館蔵)
絹本墨書 本紙100・2×29・4cm



図6 高島秋帆筆「環山」(板橋区立郷土資料館蔵)
紙本墨書 本紙28・5×65・0cm



図7 高島秋帆筆「行書幅」(宮内庁三の丸尚蔵館蔵)
紙本墨書 本紙135・7×56・9cm

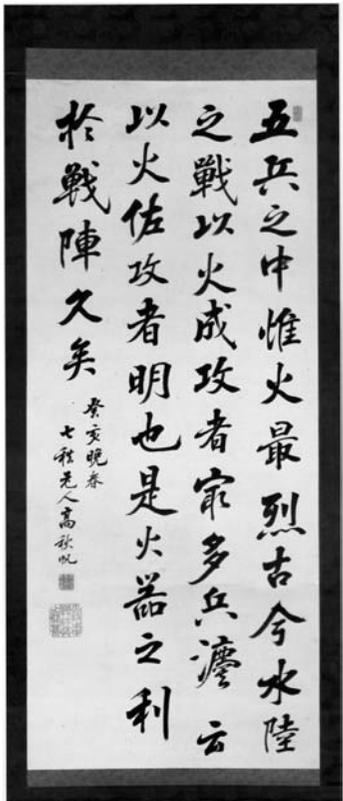


図8 高島秋帆筆「文天祥正氣歌」(板橋区立郷土資料館蔵)
絹本墨書 本紙85・0×35・5cm

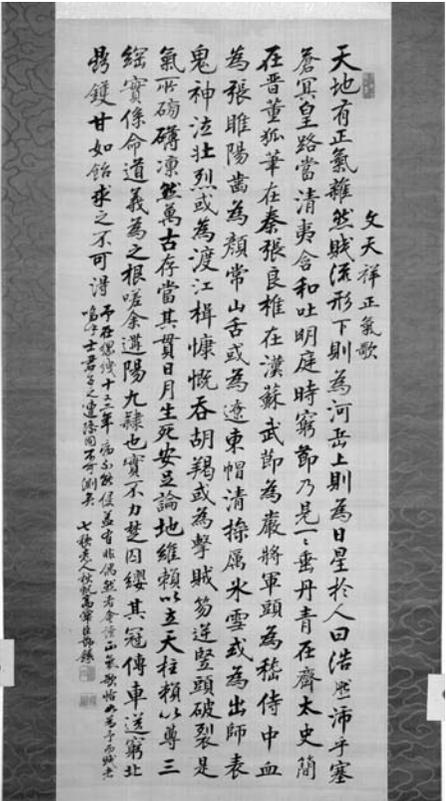


図9 高島秋帆筆「銀六曲屏風」(松月院蔵)
紙本墨書





図10 高橋秋帆筆「二曲屏風〈幽雅・秋声〉」
 (板橋区立郷土資料館蔵)
 紙本墨書 各扇本紙132・0×48・5cm

図11 貫名菘翁筆「二曲屏風〈克己復礼〉」(菘翁美術館蔵)
紙本墨書 各扇本紙132・0×57・6 cm



図12 高島秋帆筆「自画賛砲丸形茶釜図」(板橋区立郷土資料館蔵)
紙本墨書 本紙118・0×28・5 cm

